

イギリス文学と英語表現指導  
Teaching English Expression through English Literary Works

上 村 忠 実

福岡女学院大学 教職支援センター  
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

# イギリス文学と英語表現指導<sup>1</sup>

## Teaching English Expression through English Literary Works

上 村 忠 実

### はじめに

現在、日本の高等教育において、イギリス文学は、英文学専攻以外の授業では、教材として敬遠されている。それは、1980年代以降、日本の英語教育の中心目標がコミュニケーション能力の育成に収斂していったからである。それに伴い、文学教材は減少し、コミュニケーション能力育成のための教材が増加している<sup>2</sup>。

その反動からか、昨今、文学作品を教材とすることの有益性が改めて叫ばれるようになった。例えば、日本英文学会では、文学作品を用いた英語教育の在り方について研究発表やシンポジウムが行われ、その成果が研究書としてまとめられている<sup>3</sup>。

本稿では、イギリス文学は、英語表現指導において、論理的思考力を涵養するための優れた教材であることを三つの事例から導き出したい。

なぜ論理的思考力なのか。

それは大学教育において、学生に身に付けさせるべき要となる力だからである。

三つの事例とは、具体的には、Charles Dickens の *Oliver Twist*、Jane Taylor の“The Star”、William Blake の“The Sick Rose”である。授業において、これらの作品を教材として用い、どのように論理的思考力の涵養を図ったか、その実践の骨子を報告する。

### 1. *Oliver Twist*

19世紀のイギリス文学・文化を教えるための格好の教材は、Charles Dickens の *Oliver Twist* である。

学生たちの多くは、中学・高校の授業を通して、産業革命によって、イギリスが繁栄したことを知っている。ところが、その知識には偏りがある。学生たちは、大英帝国の光については知っているのだが、影についてはほとんど知らないのである。一つの物事や事象は、多角的・多面的・複眼的に見なければならぬのに、学生たちは、影の部分、闇の部分については知識が欠落している。それを補うためにも、Dickens の小説は有益である。

次に示すのは、*Oliver Twist* において、よく知られている箇所である。救貧院に引き取られた

子供たちの夕食は、オートミールのおかゆ一杯のみ。それだけでは、おなかがすいて仕方がない。もっと食べたい。おかわりがしたい。もっとほしいと言おう。誰がそれを言うか。くじ引きで決めよう。くじはオリヴァに当たる。

The evening arrived: the boys took their places; the master in his cook's uniform stationed himself at the copper; his pauper assistants ranged themselves behind him; the gruel was served out, and a long grace was said over the short commons. The gruel disappeared, and the boys whispered each other and winked at Oliver, while his next neighbours nudged him. Child as he was, he was desperate with hunger and reckless with misery. He rose from the table, and advancing, basin and spoon in hand, to the master, said, somewhat alarmed at his own temerity —

'Please, sir, I want some more.'

The master was a fat, healthy man, but he turned very pale. He gazed in stupefied astonishment on the small rebel for some seconds, and then clung for support to the copper. The assistants were paralysed with wonder, and the boys with fear.

'What!' said the master at length, in a faint voice.

'Please, sir,' replied Oliver, 'I want some more.'

The master aimed a blow at Oliver's head with the ladle, pinioned him in his arms, and shrieked aloud for the beadle.<sup>4</sup>

この後、オリヴァがおかわりを申し出たことについて、救貧院の役員会で協議が行われる。食事規定によって支給された夕食を食べたあと、もっとほしいと言い出したことが確認され、そんなことを言うとはけしからん、オリヴァは絞首刑になってしかるべし、という意見が出される。結果的には、オリヴァは絞首刑にはならず、5ポンドで売りに出されることになる。

この箇所を読んで学生たちにコメントを書かせると、さまざまなコメントが寄せられるが、学生たちのコメントは、かわいそう、ひどい、というキーワードに収斂される。そこで、なぜかわいそうなのか、なぜひどいのか、と問うて考えさせると、さまざまな意見が出される。その意見を集約すると、概ね次のようになる。

おなかがすいているのに、おかゆ一杯だけというのがかわいそう。おかわりをくださいと言っただけなのに、殴られて羽交い絞めにされるなんてありえない。ましてや絞首刑や人身売買なんてありえない。

筆者は、学生たちの言う、かわいそう、ひどい、がなぜなのかを論理的に思考させるために、

一文に着目させ、そこから、かわいそう、ひどい、を論理的に導き出すように指導した。その一文とは、“He gazed in stupefied astonishment on the small rebel for some seconds, and then clung for support to the copper.”である。

学生たちは、この英文の和訳はできるのだが、この一文から、かわいそう、ひどい、を導き出すことはできなかった。

それは、想像力の欠如のゆえであると考え。その要因は原文にあるというよりは、むしろ学生たちの食体験にある。学生たちにとって、おかゆとは、例えば、風邪をひいて、熱が出て、食欲がないときに母親が食べさせてくれたもの。栄養を摂取するための（卵が入った）おいしいもの。熱々で食べたら体が温まるもの。そのようなものだったと思われる。

オリヴァのおかゆはそうではなかった。教区吏員の Mr. Bumble は、オリヴァがおかわりを申し出たことに顔面蒼白となり、びっくり仰天して数秒間オリヴァを凝視した（He gazed in stupefied astonishment on the small rebel for some seconds）。そしてそれから、驚きのあまり倒れそうになった自分の体を支えるために、銅の大釜にしがみついた（and then clung for support to the copper）。大釜にしがみついたということは、大釜は熱くなかったということである。熱々の大釜は、やけどをするのでさわれない。ましてやしがみつくことはできない。ということは、その大釜からよそわれたおかゆは、熱々ではなかったということである。

規定の分量そのものがあまりにも少量であったとしても、そのおかゆは熱々で食べたら体が温まるようなおいしいおかゆとして供されていたのではなかった。現代であれば、電子レンジで温め直すような、冷めたおいしくないおかゆが供されていたのである。ただでさえ冷めたおかゆであったのに、さらに、食前の祈りが長々と唱えられれば（and a long grace was said over the short commons）、おかゆはますます冷める。オリヴァたちは、現代の多くの学生たちが食べたことがないような、冷めたまずいおかゆを食べなければならなかったのである。そのおかゆの冷たさこそ、かわいそう、ひどい、の根拠となるのではないかと解説した。

これは、英文和訳ができることと、論理的思考ができることは別物であるということの一例に過ぎない。しかし一方で、イギリス小説の短い一節が論理的思考力を涵養するための教材となり得ることの証左になるであろう。

## 2. “The Star”<sup>5</sup>

Jane Taylor の“The Star”は人口に膾炙している。この歌は、日本では、「きらきら星」の歌として知られている。きらきらひかる、お空の星よ、まばたきしては、みんなを見てる、きらきら光る、お空の星よ、は、武鹿悦子の歌詞である。学生たちは、原文を読むに際して、「きらきら星」の歌詞に引きずられ、この歌では、無数の星がきらきらと美しく夜空に瞬いている様子が歌

われていると思っている。しかし、それは勘違いである。日本語の歌詞が先入観として邪魔をして、学生たちは、原文の英語表現と対峙できない。

Twinkle, twinkle, little star,  
How I wonder what you are!  
Up above the world so high,  
Like a diamond in the sky.<sup>6</sup>

1行目を和訳させると、学生たちは、きらきら光る、きらきら光る、小さな星よ、という訳をする。先入観が邪魔をして、Twinkle, twinkle が命令文であることに気づかないのである。

原文では、きらきら光れ、きらきら光れ、小さな星よ、と書かれている。きらきら光れ、と命令しているということは、星はきらきら光っていないということである。勉強している人に対して、勉強しなさいとは命令しないように、きらきら光っているものに対して、きらきら光れとは命令しないからである。

日本語の歌詞では、星は光っているが、原文では光っていない。光っていないからこそ、きらきら光れと命令しているのである。星が光っていないのは、例えば、雲や霧がかかっているからである。光っているように見えないのである。2行目の感嘆文は挿入で、1行目は、3、4行目に続いている。3行目では、地上の上のとても高いところで、と、どこで光ればいいのかが表示されている。4行目では、ダイヤモンドのように、と、直喩が用いられることによって、どのように光ればいいのかが表示されている。

この詩に対する学生たちの勘違いを解くためのカギは、次に示す第3連にある。

Then the traveller in the dark,  
Thanks you for your tiny spark,  
He could not see which way to go,  
If you did not twinkle so.

この連は2文から成り、後半は仮定法で書かれている。この連の謂わんとすることは、星がきらきら光るので、旅人はどちらの道へ行けばいいのかわかる。だから、旅人は、星の小さなきらめきに対して、ありがとうと感謝をする、ということである。

第1連と第3連に書かれていることから、星について論理的に思考すると、どのような答えを導き出せるか。筆者は学生たちに次のように解説した。

日本語は、単数と複数の概念が曖昧な言語である。星が出ている、と言われても、一番星のように、一つの星のことなのか、天の川に瞬く無数の星のことなのかわからない。「星」と言われ、その星が単数か複数かわからないのである。それに対して、英語は単数と複数の概念が厳密な言語である。第1連の1行目は、little star となっていて、little stars とは書かれていない。したがって、この歌で歌われている星は単数である。この歌のタイトルも、Star であって、Stars ではない。

次に冠詞に着目すると、この歌のタイトルは The Star となっている。不定冠詞の a ではなく、定冠詞の the である。つまり、単数の一つの星と言っても、その星は、無数にある星の中のどれでもいいから一つの星 (a star) のことではない。話し手がその星 (the star) と言えば、聞き手はその星を特定できる一つの星 (the star) のことである。

その星は北半球で瞬いていると想定される。第3連1行目の traveller というつづりがイギリス式の表記になっていることからわかるように、この歌を作詞した Jane Taylor はイギリス人で、旅人は北半球で夜空を見上げていると想定されるからである。その星は、旅人が、北半球にあって、無数にある星の中で特定できる一つの星であり、その星がきらきら光れば、どちらの道へ行けばいいのかわかる星である。進むべき道がわかるので、旅人がありがとうと感謝する星である。

Jane Taylor の生没年は1783-1824年であるが、現代のように Google Map がない時代に、その星を見上げれば、東西南北の方角がわかる星。それは、地軸上にあるため、無数の星の中で唯一動かない星。動かないがゆえに、旅人の道しるべとなる星。それは北極星である。

つまりこの歌は、夜空に瞬く無数の星のことを歌っているのではない。子供たちが無邪気に歌う「きらきら星」は、原詩をひも解けば、北極星であることがわかるのである。

筆者はこの後、学生たちの想像力を働かせ、論理的思考力を高めるために、第3連1行目の traveller に着目し、traveller とは誰のことかと問うた。

それはもちろん第一義的には、スーツケースを手にして旅行をしている人のことである。我々は今、教室で授業をしていて、旅行はしていない。その意味では、我々は旅人ではない。しかし、別の意味では、我々は旅人である。たとえスーツケースを手にしていなくても、たとえ教室で授業をしていても、である。なぜなら、我々は人生という旅をしているからである。この教室で授業を受けている人は、大学生という旅をしている旅人である。

楽あれば苦ありと言うが、人生の旅はいつも順風満帆というわけではない。人生には悲しみや苦しみがある。苦難の中にあって、どうすればいいのかわからず、心が闇に包まれることがある。例えば、親が離婚することになった。これから先、どうすればいいのか。そのような状況に陥った時、人は迷うであろう。

そのような先が見えない迷いの中にあって苦悩している人が、心の闇の中でキラリと光る一筋のきらめきを見いだせば、その人は光のほうへ向かって歩みだすことができる可能性がある。夜の暗闇の中で道に迷った旅人は、北極星の小さなきらめきを手がかりに方向を見いだせば、旅を続けることができるであろう。それと同じように、迷える人の心の闇に小さなきらめきが差し込めば、それを手がかりにその人は闇を脱することができるであろう。闇に差し込む光は、希望の象徴である。

星の象徴性は、三つの次元で考えることができる。一つ目は、星は、自分の希望、夢、憧れ、目標、理想である。心が落ち込み、沈んでしまって、やる気が出ない状態であっても、そうありたい、そうなりたいという自分の希望や夢や憧れや目標や理想が、自分の心の中でキラリと輝けば、それを契機に夢や目標に向かって立ち上がることはあり得る。

二つ目は、一つ目の抽象が具現化したものである。すなわち、星とは、芸能界のスター、アイドル、スポーツのスター選手、映画スターなど、自分が憧れたり、目標としたりする有名人である。有名なスターに憧れて進路を定めることはある。

しかし、スターは、必ずしも有名人である必要はない。自分にとってのスターは、親であったり、先生であったり、先輩であったり、友人であったりするかもしれない。身近な人の輝いている姿を見れば、その人に倣って、その人のようになりたいという思いが湧きいで、そのことによって、自分の進むべき道が見えることがある。あるいは、身近な人が自分にかけてくれた何気ない一言が、悩みの中にある自分の心の中できらめき、自分の進路を見いだすこともある。例えば、中学校の時の先生のようになりたいてと考えて、教員養成系の大学に進学する人もいるし、母親の何気ない一言で理工系の大学を目指す人もいる。

有名人であろうと、そうでなかろうと、誰かが自分にとっての希望の星であるということはあるのである。それを逆に言うと、自分が誰かにとっての星であるという可能性もあり得るのである。

さらに、輝く星とは、必ずしも生きている人でなくてもよい。死んだおばあちゃんは、星になって、空から見守ってくれている、というような表現を耳にすることがあるが、星の瞬きとは、死者のまなざしでもあり得る。人は、死者の愛のまなざしに励まされて、進むべき道を見いだすこともあり得るからである。フランス文学に目をやると、サン・テグジュペリの『星の王子さま』で描かれているのは、その一例であると言えよう。

三つ目は、星は神の象徴である。イギリス文学・文化の基盤には、キリスト教があることをふまえると、この歌で歌われている星は、神の象徴であると考えることができる。北極星は、地軸上にあるがゆえに、ほとんど位置を変えない。したがって、方位および緯度の指針となる。しかし、北極星以外の星は指針とはなり得ない。なぜなら、北極星以外の星は動くからである。



すべての事物・事象・様態が変化するこの世にあって、唯一変化しないのは神のみである<sup>7</sup>。この歌で表現されている星は、20世紀を代表する英詩人 T. S. Eliot が *Four Quartets* の *Burnt Norton* において、“the still point of the turning world”<sup>8</sup>と表現していることと同義であると考えられる。キリスト教を背景にして言うと、人は、苦悩の中で、神に目を注ぎ、神と対峙するとき、進むべき道を見いだすことができるのである。なぜなら、「闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る」<sup>9</sup>からである。不動ではないもの（人間）は、闇の中で不動のものに目を注ぐとき、初めて自分の立ち位置を知る。そしてそれが救いへとつながっていく。道に迷っている旅人は、北極星に目を注ぐとき、迷いから脱することができる。それと同じように、道に迷っている罪人は、神に目を注ぐとき、罪から脱することができる。それはイエス・キリストによる贖罪であり、救いである。

以下は、上記の二つ目の象徴性について述べたことと矛盾することになるが、人は他者を見て進路を定めようとしても、見誤ることがある。人は変わるからである。不動ではないもの（人間）が、不動ではないもの（人間）に目を注いでも、自分の立ち位置はわからない。目を注いでいる者と、目を注がれている者、それぞれが変化するからである。生成発展こそが人間の生の在り方であるとすれば、不動である人間など、この世には存在し得ない。だから、変化する他者に目を注いでいると、自分の進むべき進路がわからなくなることがあるのである。

それはどういうことか。

他者に目を注いでいる自分が変わることがある。例えば、ある時までは、中学校の国語の先生に憧れて、国語の先生になることが夢だったのに、イギリス旅行をして、英語に魅せられて、帰国後は英語の先生になりたいと進路を変更することはあり得る。

自分が目を注いでいる他者が変わることもある。憧れの人がいいて、その人のようになりたいたいと思い、その人に倣って人生を歩んでいても、例えば、その人が覚醒剤の使用で逮捕されたら、その人はもはや憧れの人ではなくなるであろう。その人に倣う人生は、人として道を踏み外す人生になるからである。他者の言動に振り回されて、自分の生き方がわからなくなってしまうことはあり得るのである。それは変化する人間に目を注いでいるからである。変化しない神に目を注ぐとき、人はぶれない人生を歩むことができる。聖書の言葉を借りれば、「あなたがたは君主を頼みとしてはならない。救いのない人間の子を」<sup>10</sup>ということである。

以上のように、“traveller”を人生の旅人の意で解釈すると、“star”の解釈の可能性・多様性は広がり深まる。イギリスの児童文学作品を教材として使用することは、学生たちの想像力を豊かにさせつつ、論理的思考力を涵養するために有益であると言えよう。



### 3. “The Sick Rose”<sup>11</sup>

最後に William Blake の“The Sick Rose”(Songs of Innocence and of Experience 所収) を取り上げる。わずか 8 行から成るこの詩は、訳読のレベルでは難しくない。しかし、この詩が何を意味しているのかというレベルになると、かなり難しい<sup>12</sup>。したがって、この詩は、学生たちの論理的思考力を涵養するための格好の教材である。

O Rose thou art sick.  
The invisible worm,  
That flies in the night  
In the howling storm:

Has found out thy bed  
Of crimson joy:  
And his dark secret love  
Does thy life destroy.<sup>13</sup>

バラの花には虫がつく。目に見えないくらいの小さな虫が夜に飛んでくる。しかし、4 行目に記されているように、ヒューヒューと音を立てて吹き荒れる嵐の中では、そのような小さな虫は飛べるはずがない。したがって、虫は現実にこの世に生きている昆虫であるとは考えにくい。虫はバラの深紅色の喜びのベッドを見つめる。そして虫の暗い秘密の愛が、バラのいのちを滅ぼす。

虫がバラを愛していることに疑う余地はないが、その愛は dark secret という二つの形容詞で修飾されている。ということは、この愛の対極には、暗くない愛、秘密ではない愛、すなわち、明るい愛、公然の愛が想定される。

授業の導入として、明るい愛、公然の愛とはどのような愛かと尋ねると、さまざまな回答が出され、学生たちは他者の意見をおもしろがる。それをふまえて、本題である暗い愛、秘密の愛とはどのような愛かと尋ねると、言わずもがな授業は大いに盛り上がる。

愛はいのちを育むこともあるが、いのちを滅ぼすこともある。いわゆる愛の二面性である。愛は人を生かしても、殺しもする。最終行の life はいのちととらえられるが、生活や人生ともとらえられる。バラに対する虫の愛が、バラのいのちを、生活を、人生を滅ぼすのである。

現実に咲いているバラの花に、目に見えないほどの小さな虫が飛んできて、バラのいのちを滅ぼす、すなわち、バラの花が枯れてしまう、ということが、第一義的な解釈として考えられる。しかし、繰り返しになるが、第一連において、“That flies in the night / In the howling storm”と

いう表現がなされている以上、その解釈は妥当ではない。バラと虫は比喩的言語として読まなければならないからである。したがって、読者は、バラと虫の象徴性について考えなければならないことになる。

かつて筆者は、バラと虫の象徴性および両者の関係性について、学生たちに課題を出して、その回答を分析したことがある<sup>14</sup>。両者の象徴性について、最も少なかった回答は2パターンで、最も多かった回答は36パターンであった。

回答を分析して整理してみると、学生たちがこの詩をどのようにとらえているかがわかった。結果は、第1位：不倫84%、第2位：ストーカー68%、第3位：詐欺53%、第4位：DV 家庭内暴力37%、第5位：禁断の恋34%であった。

この結果からわかったことは、半数以上の学生は、この詩に対して、不倫やストーカーというイメージを抱いているということである。不倫やストーカー以外に出されたキーワードを羅列すると、詐欺、DV、誘惑、裏切り、病気、束縛、同性愛、近親者の恋、身分違いの恋である。これらに共通しているのは、バラ＝女性、虫＝男性であり、男女間のトラブルを連想させる解釈であった。唯一、病気というキーワードを出した回答だけは性質が異なっていて、例えば、Covid-19のようなウイルスが人間の中に入り込んで、悪さをして、その結果、人間のいのちを滅ぼすというような意見であった。

53名の学生から385の回答が出されたが、筆者はいずれも間違いではないと考えた。なぜなら、解釈の可能性を一つずつ検討してみると、いずれにも妥当性があったからである。Blake という詩人が優れているのは、象徴という表現技巧を巧みに用いることによって、わずか2連8行で表現している内容が、学生たちから出されたすべての解釈に耐え得ることである。

その一方で、これはいったい何を意味しているのかということを考えて、わかったことがある。それは、象徴の具体を考えてもキリがないということである。例えば、風邪をひいたとしても、その症状の出方は千差万別である。“The Sick Rose”では、1行目でバラは病気だと歌われ、最終行でバラのいのちが滅ぼされると歌われている。滅ぼされることはわかっていても、滅びに至るまでの症状の出方は千差万別であり、それは隠されている。したがって、追究しなければならないのは、症状の具体ではなく、症状の根源である。すなわち、象徴が内包している根源的な意味である。したがって、読者は、さまざまな具体を想起させるバラと虫の象徴性および関係性が内包している根源的な意味を究明しなければならない。そのためには、論理的思考力が必要である。

この詩の場合、それを解くカギは、2行目の“invisible worm”という表現にある。worm という言葉の語源は、serpent あるいは dragon である<sup>15</sup>。Blake は、キリスト教神学の立場から言えば、正統ではない。それは、Blake の贖罪観が極めてキリスト教的な表現を取りながら、その内

容は聖書の説くものとは異なっているからである。しかし、Blake 自身は聖書を信じ、自分自身をクリスチャンであると告白している<sup>16</sup>。彼は、聖書から多大なる影響を受けているが、聖書を題材にして書かれた John Milton の *Paradise Lost* から少なからぬ影響を受けている。*Paradise Lost* では、サタンは“that false worm”<sup>17</sup>（あの嘘つきの虫）と表現されている。これらのことを考え合わせると、Blake が“invisible worm”と表現した虫には、旧約聖書の創世記第3章に記されている蛇、すなわち、サタンの象徴性が内包されている<sup>18</sup>。

一方、バラは、Blake が生きたイングランドの国花であることから、イングランドという国、そしてそこに生きる人々、すなわち人間の象徴であると考えることができる。バラは、一般的には、女性の象徴であるが、実は男性をも象徴し得る。現代の生物学の知見によると<sup>19</sup>、男性も女性も、本来は女性である。すなわち、人間の原形は女性である。したがって、バラの花は、性別を問わず、人間の象徴となり得るのである。

以上のことを総合すると、“The Sick Rose”は、Blake 版の失樂園、すなわち、創世記第3章の詩的表現である。目に見えない虫、すなわちサタンは、吹き荒れる嵐の中であつても飛んできて、人間の心の中に入り込む。そして、人間を悪へと誘惑する。すなわち、人間を神から引き離す行為の根源となる欲望を生じさせる。その結果、人間のいのち・生活・人生は、最終的には滅びへと至る。ただし、滅びに至るまでの具体は千差万別である。そこに解釈の可能性や多様性がある。この詩は、創世記第3章に記されている失樂園をその根源に内包し、表層においては多種多様な具体の想起を可能ならしめる“a vaguely disturbing parable of the death instinct”<sup>20</sup>であると結論づけることができる。

## おわりに

本稿では、イギリス文学は英語表現指導において優れた教材であることを三つの事例から明らかにした。文学作品に見られる英語表現について考えさせることによって、学生たちの思考の幅は広がり、解釈は深まる。その結果、学生たちの論理的思考力は涵養されることになる。

日本の高等教育において、英語教育は、1980年代以降、文学教材が排除され、コミュニケーション能力育成のための教材が主流となった。それは、一つには、文学教材を用いた授業が訳読中心であったことの反省からでもあったと考えられる。その一方で、コミュニケーション能力が狭義に解釈され、実用主義に偏重したきらいもある。

今後の英語教育のためには、実用主義に偏重しないコミュニケーション能力育成のための新しい教材と指導法の開発が必要である。他方で、文学作品を用いた新しい教材開発と指導法の開発も必要である。本稿で示したように、文学作品は論理的思考力を涵養するための一助となるからである。今後、文学作品を教材として行われる授業は、1980年代まで行われてきたような訳読中

心を脱し、広義のコミュニケーション能力を育成するために資する学修者本位の授業でなければならない<sup>21</sup>。

それを実現するための一つのヒントは、詩歌を用いた学習活動を行ってみることである。Alan Maley は詩歌の持つ有益性を10項目に整理・文類しているが、Ambiguity の項目において、詩歌について、次のように述べている。

It has a 'public' and a 'personal' meaning. In teaching, this is an enormous advantage. It means that, within limits, each learner's personal interpretation has validity. It also means that, because each person's perception is different, an almost infinite fund of interactive discussion is possible.<sup>22</sup>

要するにここでは、詩歌を用いた学習活動として、“interactive discussion”の有益性が説かれているのである。ここに従来の訳読中心とは異なる文学教材を用いた指導法が示唆されている。3文目の“each learner's personal interpretation has validity”は、本稿の第3節において述べた学生たちの種々多様な解釈がいずれも妥当性があつたことと合致する。

イギリス文学、特に詩歌を用いて英語表現指導をする際には、原文を読んで和訳するにとどまっていた段階から、詩歌を経験させる段階へ<sup>23</sup>、そしてそれを“interactive discussion”させる段階へと発展させることが理想形である。

しかし現実には、詩歌を経験させるだけでも大変なことであり、それを経て、“interactive discussion”のレベルへと引き上げるのは、筆者には至難のわざである。学生たちは、“interactive discussion”するためには、論理的思考力だけでなく、コミュニケーション能力も有していなければならない。両方の力を併せ持つ学生の数がクラスの半数を超えたとき、“interactive discussion”の段階へと引き上げることは可能となるであろう。

## 注

<sup>1</sup> 本稿は、日本英語表現学会第52回全国大会シンポジウム「文学作品と英語表現指導」（2023年12月3日、於福岡女学院大学）において、提案者として口頭発表した原稿を加筆修正したものである。

<sup>2</sup> 高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』（ひつじ書房、2015年）、p.v、pp. 47-52.

<sup>3</sup> 例えば、日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』（研究社、2017年）など。

<sup>4</sup> Charles Dickens, *Oliver Twist* ed. by Philip Horne (Penguin Books, 2002), pp.14-15.

- <sup>5</sup> “The Star”については、拙論「英詩における旅」『旅』 テーマ・シンキング叢書005（ミッシェンプレス、2015年）、pp. 68-75参照。
- <sup>6</sup> Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (Oxford University Press, 1951), p.397.
- <sup>7</sup> 新約聖書「ヘブル人への手紙」13章 8 節参照。
- <sup>8</sup> T.S.Eliot, *The Complete Poems and Plays* (Faber and Faber, 1969), p.175.
- <sup>9</sup> 新約聖書「マタイの福音書」 4 章16節。聖書からの引用は、『聖書』新改訳2017（いのちのこ とば社、2017年）による。
- <sup>10</sup> 旧約聖書「詩篇」146篇 3 節。
- <sup>11</sup> “The Sick Rose”については、拙論「英詩における病」『病』 テーマ・シンキング叢書011（ミッシェンプレス、2021年）、pp. 35-43参照。
- <sup>12</sup> C.D. ルーイス 『詩を読む若き人々のために』 深瀬基寛訳（ちくま文庫、1994年）、p. 125参照。
- <sup>13</sup> David V. Erdman ed., *The Complete Poetry and Prose of William Blake* (University of California Press, 1982), p.23.
- <sup>14</sup> 拙論「詩歌における英語表現」『教育実践研究』 第 2 号（福岡女学院大学教職支援センター、2018年） 参照。
- <sup>15</sup> 竹林滋編『新英和大辞典』 第六版（研究社、2002年）、p. 2847.
- <sup>16</sup> Annotations to *An Apology for the Bible*, Letter I, [p.5]. (Erdman, p.614)
- <sup>17</sup> John Milton, *Paradise Lost*, Book IX, l.1068, ed. by Alastair Fowler (Longman, 1968), p.500.
- <sup>18</sup> Cf. Peter Milward, *English Poems and Their Meaning* (Turumi Shoten, 1992), pp.53-54.
- <sup>19</sup> 福岡伸一『できそこないの男たち』（光文社、2008年）、『生物と無生物のあいだ』（講談社、2007 年） 参照。
- <sup>20</sup> Wilfred L. Guerin et al., *A Handbook of Critical Approaches to Literature*, Third Edition (Oxford University Press, 1992), p.141.
- <sup>21</sup> 学修者本位は、2018年中央教育審議会答申「2040年高等教育のグランドデザイン」で使用され、それ以降、高等教育の改善について考える際のキーワードとなっている。
- <sup>22</sup> Alan Marley, “Poetry and Song as Effective Language-learning Activities” *Interactive Language Teaching* ed. by Wilga M Rivers (Cambridge University Press, 1987), pp.93-94.
- <sup>23</sup> Cf. Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Poetry*, Fourth Edition (Holt, Rinehart and Winston, 1938), p.16.